尿沈渣で推定できた悪性リンパ腫の１例

◎山本 琴美[1)]、甲斐 美紗樹[1)]、木下 史暁[1)]、近藤 妙子[1)]、松岡 拓也[1)]、田上 圭二[1)]
恩賜財団 社会福祉法人 済生会熊本病院[1)]

【はじめに】尿沈渣に出現する異型細胞の約 90%は尿路上皮癌細胞であり、悪性リンパ腫細胞が出現することはまれである。今回われわれは、尿沈渣で悪性リンパ腫細胞を推定できた症例を経験したので細胞像を中心に報告する。

【症例】80 代、女性。

【既往歴】肝細胞癌(2008 年)、肺門部濾胞性リンパ腫(2011 年)、濾胞性リンパ腫多発リンパ節転移(2015 年)。

【現病歴】肝細胞癌および濾胞性リンパ腫のため当院外来に通院中であった。数日前から倦怠感や脱力、頻尿、下肢浮腫が増悪し、体動困難となったので当院救急外来を受診し、精査加療目的で同日緊急入院となった。

【入院時尿検査所見】茶色混濁、蛋白(3+)、潜血(3+)、白血球(+)、赤血球(21364/HPF)、白血球(10-19/HPF)、細菌(3+)、異型細胞(悪性リンパ腫を疑う細胞)。

【尿沈渣所見】多数の赤血球を背景に、白血球よりやや大きく、N/C 比が極めて高い類円形細胞が孤立散在性に出現していた。細胞には核クロマチンの増量や核小体、核の切れ込み不整がみられ、悪性リンパ腫細胞を疑った。そのため、すぐに塗抹標本を作製してメイ・ギムザ染色で確認し、悪性リンパ腫を疑う細胞として報告した。

【画像所見】入院時の造影 CT 検査では 2 ヵ月前と比較して肝細胞癌の増大を認めた。また、膀胱の全周性壁肥厚および膀胱周囲から直腸周囲や骨盤腔に至る腫瘍性病変が新規に出現していた。新規病変は悪性リンパ腫の転移が疑われた。

【組織診断】骨盤内の腫瘍性病変から針生検が行われ、免疫染色で CD20 ・ CD10 陽性、CD3 ・ CD5 陰性、MIB-1 陽性率 50%以上で、びまん性大細胞型Ｂ細胞リンパ腫（濾胞性リンパ腫からの形質転換）と診断された。

【まとめ】尿沈渣で異型細胞の結合性のなさ、N/C 比の高さ、核の切れ込みに着目したことで悪性リンパ腫細胞を推定できた。悪性リンパ腫細胞を疑った場合、さらに尿沈渣で迅速に塗抹標本作製とギムザ染色を行うことで、より正確に鑑別することが可能である。

連絡先：096-351-8000